14.5-522
1200700562011
A
143

東亞調査會講演集（昭和十年第一輯）

文學博士　鳥居龍藏講演

滿蒙に於ける契丹の遺跡に就て

東亞調査會

立憲民政黨
政務調査館
10.11.13
A
143

始

支那史上の契丹（挨拶）

東亞調査會長
大每、東日社賓　德富蘇峰

滿蒙に於ける契丹の遺跡に就て

東亞調査會評議員
文學博士　鳥居龍藏

附

東亞調査會規程、同顧問及役員

支那史上の契丹（速記）

徳富蘇峰

本日は御多忙にも拘らず皆様おいで下さいまして洵にありがたく存じます。大概私が申上げることは平井さん（東亞調査會專任理事）がたゞ今御話になつたから、この上、申すこともないやうでございますが、二三御參考のために鳥居先生のお話の前ぶれとして申上げておいた方が良くはないかと思ふことだけを申上げておきます。

鳥居先生は昨年の八月の三日東京をたゝれまして、十二月廿四日にお歸へりになりました。さつと半ケ年であります。この間先生は夫人、それに御次男、それにお嬢さんと、全く水入らずの親子四人で行かれたのです。それでその四人の方々がすべて一つの目的に向つて働かれた。例へば、夫人は蒙古語がよくお出來になつて、通譯を、お嬢さんは寫生をなさつた。色々のものをおうつしになる。また御次男は先生の助手として色々のことをや

つてをります。實に世の中に夫婦心を同じくして仕事をするなどゝ云ふことは、こゝにおいでになつてゐる皆様方でも、いくら立派な奥さんをお持ちになつても、餘程少ないだらうと思ひます。とかく世間の奥様は夫婿の仕事には同情する者が少い様であります。然るに鳥居先生の御夫人はむしろ先生を鞭韃する、と云ふと少し語弊があるが、そして半ケ年の間お暮しになつた。

先生の行かれましたところは熱河省でありまして、その他熱河省のみならず、興安省の一部にも行かれたのであつて、今日の所謂内蒙古です。主として御探險になつたのは契丹であります。契丹のことにつきましては、鳥居先生のお話がありますから、私が餘計なおせつかいは申しませんけれどもが、契丹と云ふものが如何に支那の歴史に關係があるかと云ふことだけは、一言御參考のために申上げておきます。

元來、宋の歴史につきまして、皆様方御承知になつてゐることでありませうが、その歴史の主なる問題は、對契丹の問題であります。契丹に如何に處するか。契丹に如何に對するかと云ふ問題なんです。北宋の大政治家どもが一生懸命に骨を折つたのはこのことなん

です。御承知の通り、五代の時に後晋の石敬塘と云ふ男が、契丹に燕雲十六州を賄賂した。契丹の力を借つて支那内地で自分が帝位をとつたんです。これは支那に昔からあつたことであつて、珍らしくもなんでもないことですが、それで契丹は石敬塘から燕雲十六州を一度にとつてしまつたから、契丹の勢力と云ふものは支那の北方にずつと進出して來た。その時に宋が支那をうけついでゐる。支那内地の泰平を保つことになりましたが、契丹から來る勢力と云ふものは非常に盛んであるからして、宋の方ではとても兵力ではいかないからして、兄弟と云ふことになつた。どつちを兄貴かと云ふこと、即ち契丹が兄貴か、宋が兄貴かと云ふことが外交上の大問題です。致方がないから、とにかく賄賂をやると云ふことで、宋を兄とし、契丹を弟とし、毎年宋の方から賄賂をやると云ふことで話がまとまつた。しかるに賄賂をやる時に、契丹の方からは「献納と云へ」「いやそれは云へない」といふことになつた。支那の富弱と云ふのは御承知の通り偉い政治家です。この富弱の手柄と云ふものは、契丹に向つて献納の二字を爭つたのです。

支那の八家文や何かを御覽になりまして、老蘇の書きました審敵審勢などと云ふものは

皆契丹に對する策論です。東坡の弟の蘇潁濱が契丹に使ひした時、契丹では「いや珍らしい男が來た、お前は東坡の弟か、東坡はどうしてゐるか」などゝ云ふことを聞かれたと云ふことで、蘇潁濱が作つた詩があります。

文章を以て蠻貊を動かすこと莫れ。恐らくは談笑して、江湖に臥すことを妨げん。

と云ふ詩があります。兄さんがあんまり良い文章を作るもんだから、契丹にまで兄さんの文章が入り込んで、遂に世界的に名譽を得てしまつた。そのために兄さんが隱居しようとしても、出來ないようになつたと云ふことがありますから、これを見ましても、如何に契丹の文化が宋の文化に近よつてゐたかと云ふことが分るのです。即ち、今から鳥居先生のお話になる中には、契丹の文化と云ふものがどの位に進んでゐたかと云ふことが多分あるであらうと思ひます。果してそのようにお話になるかどうかはまだ承つておりませんがしかし皆様お承はりになることであらうと思ひます。

契丹は今申しました通り、宋には大變關係がある。王安石が改革をやつたことも、所謂新法と云ふものも、あれは契丹に對しての改革で、國防をなすには內を盛んにしておかな

ければならぬ、兵隊を作るには國を富さねばならぬ。王安石の政策と云ふものは、富國强兵の政策である。誰に向つて富國强兵するか。契丹に對してであつたのであります。それが遂に出來なかつたのであります。丁度日本におきまして、外交の切迫しかけつゝあつた初めにおいて、水野越前守が大改革をした。これは何かと云へば、やはり外に對する力を養ふのには、先づ內を改革しなければならぬと云ふことであつたのであります。私はそう云ふことを考へて見れば、この北宋と契丹の歷史と云ふものは、我々に少なからざる教訓を與へるものであらうと思ふのであります。そう云ふ譯でございますから、どうぞ詳細に亘る鳥居先生のお話、即ち一家擧つておやりになつたところのその結果の詳しいお話、これは映畫で云へば封切なんです。誰れも未だ聞いたことはないのです。實はお聞かせするのは惜しいような氣がしますが、私共だけ聞くのは罰かぶりと思ふから、御案內申上げたような次第であります。

どうぞ御ゆるりとお聞き下さるように願ひます。これだけ申上げます。

滿蒙における契丹の遺跡について（速記）

文學博士　鳥居龍藏

一

これから皆様に御話申上げます。私の契丹の調査は餘程古くからやつてをるのでありまして、大分あちらこちら參つて調べましたのです。今回は昨年參りました私の道筋の大體を御話致しまして、それから最後に契丹のことについて或る一二の事實を申上げようと思ふのであります。それから私は近頃東方文化學院東京研究所で契丹についての論文を書いてをるのでありまして、その圖版のある部分は百枚ばかりあそこの別室に出して置きましたから御覽を願ひます。あゝ云ふような圖をつけて今論文を書いておるのであります。いづれ出來上りましたならば十分な御批評を願ひたいと思ふのであります。

契丹と申しますと丁度日本の平安朝の始めから二百十年ばかり榮へた國であります。こ

れは王と云はずして皇帝と稱してをります。今德富先生の御話がありました契丹の國は遼と云ふ國でありますが、その遼の國がありました時に、その南にありましたのが丁度北宋でありました。今德富先生の御話のありました北宋がそれであります。その關係が非常にこの契丹の文化史或は考古學の上などに大變見えるんです。契丹において殘つてゐる遺跡遺物の中に、北宋において亡んだものが殘つてゐるような例がある。これは陳列のところにも出しておきましたが、繪畫の如きがそれでありまして、御承知の如く宋は北宋と南宋とこの二つあります。南宋の墨繪風のものはこれは藝術家その他の方も御承知のことでありますが、北宋の繪に至つては殆どそれがないのであります。日本におきましては、僅かに井上侯爵家にありますところの桃と鳩、或は鴿の繪の如き支那においても北宋の繪と云ふものは極珍らしいのです。昨年瀧文學博士が『國華』の上に北宋の山水畫を出されてをられました。これは清朝の御所藏の一つであります。非常に珍らしいものであります。然るに北宋においてなくなつた繪と云ふものが契丹に殘つてゐる。あそこに出して置きました遼の陵の中にある壁畫の如きは、即ちそれであります。山水畫もあれば、人物畫もある、

デコレーション、裝飾模樣もあります。北宋の繪畫と云ふものが契丹において間接に殘つてゐることが分るのであります。

それからなほそのほか藝術の方面において非常に比較すべきものがあります。これはいづれ後に申上げるつもりでありますが、そこで私は昨年八月から十二月まで參りまして調査致しました。それは熱河省を中心として、なほ興安省の西部及び察哈爾省の一部分を調査致しました。これは昔の內蒙古であります、今滿洲國になりましたけれども、これは內蒙古の部分も含んでおるのであります。

二

で、今回參りました目的はどこにあつたかと云ふと、こゝに掲げた地圖に赤で中京と云ふ名前を掲げてありますが、それを中心として調べたのであります。この中京は熱河省の朝陽と承德に東西に一線をひきますと、それよりも北の方にある赤い峯と書いてある赤峯と云ふところの南にあるのであります。老哈河と云ふ河の流域に存在してゐる。その中京を目的に熱河省に參つたんであります。

契丹卽ち遼は盛んな時には京を五つこしらへておつた。卽ち北の方に上京と云ふものがあります。それは今日の蒙古で申しますと小巴林蒙古と云ふところであります。近頃まで林東縣と云ふのが新らしく出來てをつたのでありますが、これは昨年滿洲國が縣を取り消して蒙古人に自治を與へて、また內蒙古にしてしまつた、あの上京と云ふところに契丹の皇帝がおられたのであります。今こゝに、その時の跡が殘つております。これは嘗つて各所で四五年以前に話をしたことがあると思ひます。それからその南に中京があり、それからこゝに南京（ナンキヤウ）と云ふのがありますが、今日の北平、卽ち北京の土地であります。北京が政治上の中心になつたと云ふのは、契丹がこゝに南京を置いたがためであります。今日北京に殘つておりますところの煉瓦の十三重の塔の如きは、大概この時に出來たものであります。それから東の方に東京と云ふのがある、これは今日の遼陽でありまして、今日遼陽縣と云ふ縣がありますが、あの縣は周圍に煉瓦の城壁がめぐつておりますが、あの煉瓦の城壁は明の時に出來たのでありまして、丁度今日の遼陽縣城に接近して遼の時の東京故城が殘つて居ります。以上の如く、北の方に上京、その南に中京、更にその南に南京、東京と

出來まして、そして西の方に西京と云ふのがありました。これは今日の山西省の大同府がこれであります。そしてこの附近一帶を治めてをつたのであります。

三

今回はそのうち中京へ調査に參りました。それでまづ中京に行きました大體のことを申上げますが、（南滿洲沿線は略す）此處に行くに先づ錦縣から調べました。この錦縣と云ふのは昔の錦州であります。こゝに立派な遼時代の塔が立つてをります。これは皆樣おいでになつた方はお分りですが、あれは遼の道宗の皇后が舍利をおさめるために建てた塔であつて、非常に立派な塔であります。この塔は滿洲の遼陽にありますところの白塔と非常に似た塔であります。かう云ふように調べましてそれから義縣と云ふところに參りました。義縣にも遼時代の遺蹟が大分殘つております。こゝに寫眞に出しておきましたが、契丹卽ち（遼）の時のお寺が今そのまゝ殘つてゐる、これは關野博士もおいでになりましたが、これは遼のこゝに中京が出來ました當時に、出來た寺であります。その時分に寺は各所に木造の寺はあつたのでありませうが、今日これだけ殘つてをるのであります。この殘つてゐ

る遼の時の木造建築がよく分るのであります。この寺の中に金や、元、明、清の碑文が殘つてをりまして、この寺の來歴を良く書いてをります。今日殘つてをりますところの木造の遼時代の寺は悉く同時代のものであるとは云へないが、金の時分にも重修してをります。これは卽ち南宋であります。それから元、明になつても重修してゐるのであつて、此處は度々の重修にかかつて居るから、各時代の樣式が見えるわけであります。

私は自分の立場から建築、壁畫、佛像色々なものを調査致しました。それから裝飾模樣があります。これ等を調べて、それから義縣から數里距てた所に、萬佛洞と云ふ洞穴があります。これは北魏時代の洞穴であつて、これに佛像が彫られてゐる。こゝに行つて見ました。これは北魏でありますからよほど時代が古い。こゝに北魏の碑文が二つ殘つてをりまして、これは景明三年五月五日、太和二十三年四月二十八日の碑である。これは吉林省輯安縣にある彼の高句麗好太王碑を除くと滿洲で古い碑です。この時分には朝陽に龍城と云ふのがありまして、それから筋をひつぱるべきであります。龍城の城壁はおぼろげながらまだ朝陽附近に殘つてをります。この洞穴内の一室で私共一行は一晩寢たのです。此處

は、下に大凌河の流れを見て非常に景色の良いところで、馬賊のことなどを忘れて調査しました。

それから進んで朝陽へ來た、朝陽は今日仲々盛んなことろになつてをりますが、元は三座塔と云つた。これは蒙古語のコルバンサバラガと云ふのを漢譯したものです。今でも塔が殘つております。こゝで調査をした。朝陽と云ふ名前は後に乾隆あたり康熙乾隆あたりにつけた名前でありまして、これが段々盛んになつて來た。これはもと土默特と云ふ蒙古で、朝陽の市内には喇嘛廟がありまして喇嘛のお寺には蒙古の坊さんがをります。北魏の時にはこゝが龍城と云ふところであります。遼になつてはこゝが興中州と云うて非常に大きなところであつて盛んなところでありましたがために、契丹時代の遺跡遺物が非常に多い。例へば塔が六つ程ある、朝陽の市内に三つ塔があり、尙河を距てゝ鳳凰山と云ふ河の向ふの山の上に三つ塔があつて、都合六つばかりの塔が殘つてゐる。朝陽市内の三座塔の一つは今は破損してゐる。それから當時の陀羅尼幢であるとか、碑であるとか殘つてゐます。當時の興中州の盛んであつたおもかげを見ることが出來ます。

四

朝陽から熱河卽ち承德の間には、また遼から或は金の初め頃の遺跡が非常に多いところであります。この間の調査をして承德に參りました。

承德は皆樣御承知の如くあの清朝の離宮のあつた場所であります。離宮の跡、それから周圍の丘陵の上に大きな喇嘛廟があちらこちらに殘つてゐる、かように康熙、乾隆あたりの香ひのするところであります。

此處に清朝時代の圖書館がありますが、同館には康熙乾隆あたりの圖書の初版ものを見ることが出來ます。…承德は新らしい時代に屬する所でありますが故に、これは單に一見しただけで、深く調査は致しません。大體見ただけでありまして遼あたりの遺跡のあるところには眼をふれて調査致しました。それからこれを終つてから遼の中京の調べになつたのです。これが非常に困難であつたのであります。なぜかと云ふと、今日の熱河省、昔の直隸省の一部分、承德府一帶と云ふものは、特別省になつてをつたもので直隸の特別區域になつておつて所謂承德府の管轄でありました。

私が丁度廿八年程前にこゝにあります喀嘛沁右旗と云ふ蒙古の王樣のところで私の家內、私などと家庭教師相談役と云ふので一年半程をりました時、私の蒙古語の先生と一緒に陰山山脈を越へて中京へ二人で旅行したことがあります。その時分には山の中は炭燒でありますとか、極く質朴な蒙古人、質朴な支那人と云ふようなわけで宿などには非常に困難であつたが、危險はなかつた。然るに今回はこのところは危險な位置に立つて來た。なぜかと云ひますと、熱河の大討伐後と云ふものは匪賊は皆これへ逃げ込んでゐる。そしてこゝには滿洲の兵力と云ふものも足らない。日本人の守備隊もこの中にはをりません。その關係で、こゝに平泉と云ふのがありますが、この平泉からこれへ入り込まねばならぬ。支那里數の二百四十里位のところです。支那馬車で二日位で行けますが今度はそうはいかない。守備隊の方などに御相談してもこゝは行かない方が良いと云はれたが、承德の特務機關に松室大佐と云ふ方がをりまして、この人がこれは面白いから行つた方がよからうと云ふので、御相談の結果、こゝへ行くことになつた。これは大に御世話になりました。こゝに感謝の意を表しておきたい。中京の管轄內に、寧城縣と云ふ縣がありますが、

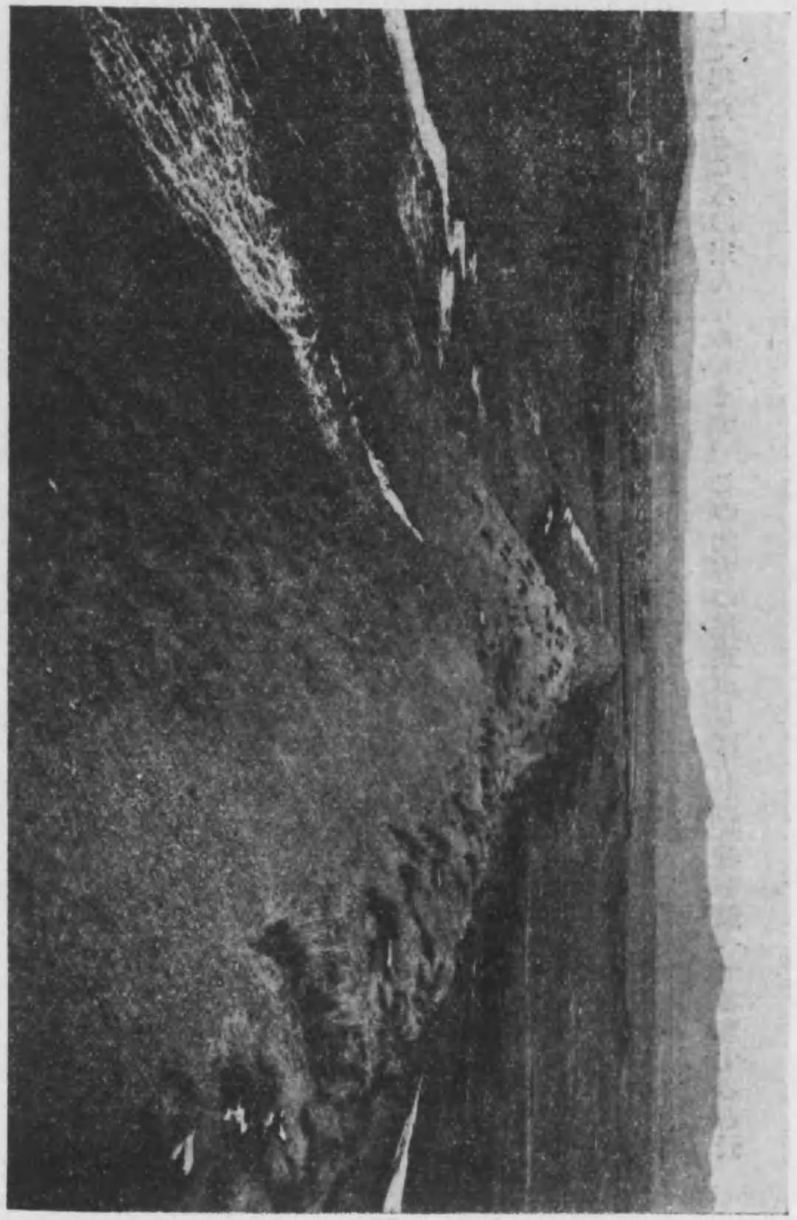
これは殆ど勢力がない縣であります。然るに此處には喀喇沁(カラチン)中旗の王様がおられ、そこで蒙古の王様に頼み込みまして、蒙古の馬隊がある。この蒙古の馬隊の保護を受けて一緒に中京に行くことになつた。それで平泉と云ふところに私共一行が參りますと、こゝには喀喇沁中旗の出張所があり、此處で降りました。そうすると喀喇沁中旗から八九十人の蒙古騎兵が來て、私共も馬に乘つて一緒に向つて行つたのであります。御承知の如く承德、朝陽に一線をひきますとこの線から南の方は河がみな渤海に注ぐのであります。然るに、中京の土地はこゝに峠があつて、この峠を越すと河の流れは皆北へ流れる。即ち老哈(ラオハ)河になる。老哈河と云ふ河は中京の南あたりから源を發しまして、色々な川を合して遂に潢河(シラムレン)と云ふ河に合する。潢河と云ふ河は今日の言葉で申しますと察哈爾省の山、興安嶺の方から流れて來て、そして東の方に向つて流れてゐる。これを蒙古人はシラムレンと云つてをります。この潢河の河にこの老哈河が合して、そしてこれが段々色々な水を集めて鄭家屯附近から奉天の西の方に流れて營口に注ぐ。即ち遼河になる。この老哈河と潢河と云ふのは昔から契丹民族の雄飛しておつた場所、遊牧してをつた場所であります。

契丹と云ふ民族はこれは東胡と書いてゐる民族です、かの鮮卑烏丸と云ふ民族になる。鮮卑の方から契丹と云ふ民族になり、烏丸の方から奚(ケイ)と云ふ民族になる。そして奚は老哈河の流域に活動し、契丹は潢河の流域に活動してをつた。それですから今の潢河流域から老哈河の流域一帶と云ふものは契丹の調べにおいては忘るべからざる所で、この方面に私共が仕事をしてゐるのは彼等の殘してゐる遺跡遺物を見んがためであります。契丹人に直接ぶつつかるにはこのあたりであります。中心をなすものであります。それでこの峠を越へて中京の方へ參りますと河の流れが老哈河となつてみんな北の方へ流れるのであります。そして、この中京のこの邊一帶と云ふものは西の方から山海關あたりの少し東の方に走つてゐる。即ち萬里の長城の走つてゐる陰山の山脈であります。これから黑龍江の方から今日の承德の方面に向つて北の方から南に走つてゐる所謂興安嶺があります。即ち興安嶺と陰山とがぶつつかつてゐるところが今日の承德であります。それですから山が多い。けれども、一度東の方へ入ると沙漠地になつてゐる。また、西の方にも沙漠地があります。

この方面が日本人のために仕合せなのは西洋の學者が案外學問上、手がついてゐない點があります。蒙古でも西の方は手がついておりますが、この方面は日本人學者の爲めにとり殘されてゐる。此點に向つて我々は活動しなければならぬ。私が卅年程前からこのあたりに注意してをるのは滿洲國を日本が認めたがためではなく、政治的の意味でもない。學術上どうしても我々學者として調べなければならぬと云ふ考へから手をつけ始めたのであります。幸ひ今日は滿洲國になり、また日本がこれを認めるようになりましたがために、なほ一層この必要を感じて來てをります。

五

そこでこの中京のことは一寸申さなければなりませんが、何故にこゝに遼の中京が出來たかといふと、契丹は上京(潢河の北にあり)が都であつた。遼の最初からずつと遼の聖宗までこゝに居住してをられた。それですから、契丹の皇都の中心地を知らうとするにはどうしても上京の調べをしなければならぬ。上京のことには餘り今日ふれることはよしますが、一寸話の順序上申しておきますが、この上京には今日でも、立派な遺跡が殘つてゐる。



遼上京都城遺址（白居易博士寫眞）

土壁が、二里半の土城がこゝに殘つております。中に皇居や建物の跡、それから寺院の跡など、民衆の住つておつた場所、佛像、塔などが殘つてをります。其處の掘り返へされたところを見ますと、當時の宮殿にふかれた瓦、礎、當時用ひたところの陶器の破片や瓦塼の破片などが散亂としておつこちてをります。或は當時の宋の錢なぞと云ふものをこゝで拾ふことが出來ます。大變昔のおもかげが殘つてゐるところで、こゝに皇帝が住つてをつた、この皇帝の住つてをりましたのはいつ頃であるかと云ふと、それは丁度日本の平安朝藤原時代に當ります。

まだ北宋にならぬ唐の末から內亂になりまして支那に五つの中心が出來た五代であります。平安朝の初期になります。この時に潢河の流域、卽ち今日の上京の附近、遼の太祖が附近の同じ民族を征服した。五代のあるものは屢々契丹に加勢を求めて自分の他に對する勢力を得ようとする。そう云ふ風でこゝに契丹民族を中心としてその附近の民族もこれに統一せられ、また南支那から不平の連中が入つて來る。またしば〳〵長城以南へ出て進出して得たところの宋人もあります。この北方の民族がしば〳〵長城を越へて掠奪すると云

ふ意味は馬賊とは大變違ふのであります。單に金錢物品をうると云ふのでなく人を得ると云ふのが目的である。由來、北方は淋しい。如何に勢力を張つても人がなければならぬ。それで南から人をとつて來て各所へ植へつける。そう云ふ風なわけで、鍛冶屋であれば鍛冶屋、農民であれば農民をあちらこちらに配つた。そして北方民族の掠奪と云ふものは以上の如き意味であります。契丹はそんなことをやつたので、このあたりに大きなグループが出來た。このグループが出來た勢ひと云ふものは、面白いことには、次第に滿洲の方に及んでおります。

それは渤海でありまして、渤海は遼の太祖の起つた時には今日の吉林省、寧安縣（密古ハンタ塔）の南に渤海の王城があるが、遼の太祖がその子息などゝ一緒にこれを亡くしてしまつた。そして渤海人を內蒙古の方に連れて來てをります。そして滿洲と云ふものは契丹のものになつてしまつた。そして今日の遼陽の地に東京府を設け、以て契丹の東の守りにいたしました。それはもと渤海が持つてをつた所である、私は先年此處を發掘致しましたが、その當時のものが殘つてゐる。土壁なども殘つてゐる。

更に西の方はどうかと云ふと、當時カラコルムと云ふところにをりました東トルコ民族の回鶻との關係が密になり、土耳古は契丹に好意をもつて隷屬した形になつて來た。なほその南西にあるところの西夏――今日の西藏人です――この西夏も亦契丹人との關係で殆ど契丹人は自分の國のような感じになつて來たのであります。

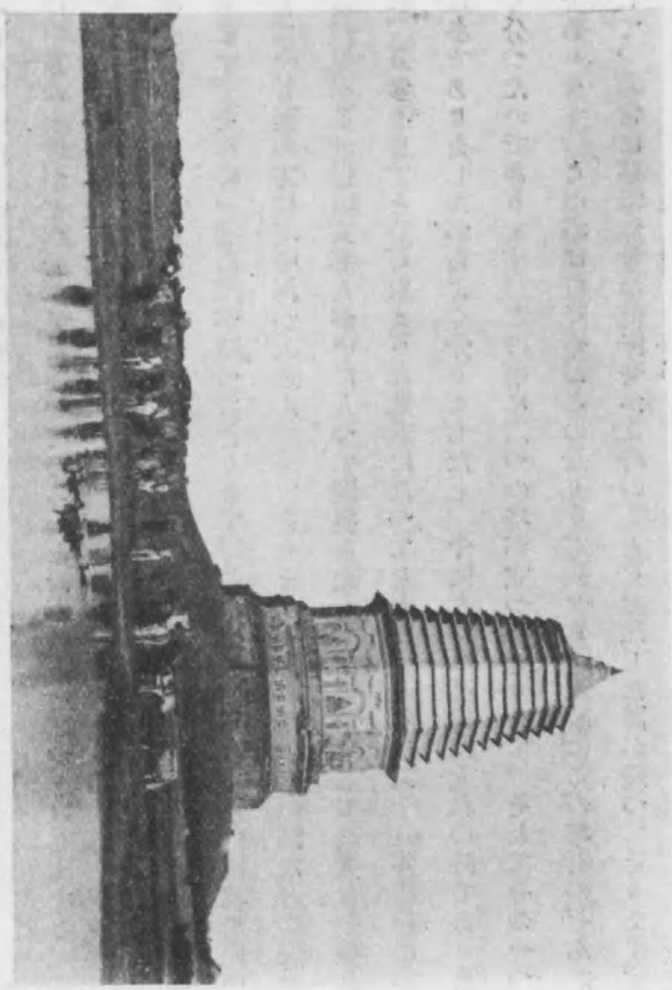
そう云ふわけで上京即ち皇都が當時非常に中心になつて西夏もこれに使節を送る、又土耳古もなびいて來る。そして南の方にも勢力を得て來た。これは兄弟の誓をしたと云ふ北宋の關係であります。北宋は契丹といつか衝突が免れないと云ふ考を持つてをつたのであります。聖宗の時にこれが及んで來た。聖宗は當時まだ小さかつたのでありますが、この聖宗の母たる皇太后が非常に偉い人でありましてお母さんと一緒に北宋を侵してをります。當時北宋においても五代を征服しまして支那が漸く統一出來たまだ新らしい時であります。北宋の太祖から太宗にかけて、戰爭と云ふものを非常に面白く思はず平和に向つた。そして佛教を信じ儒教を盛んにし散逸してゐる書物をみな朝廷で集めようとして文物が忽ち盛んになつた時であります。その時に契丹もやはり盛んになりかけた、兩方の勢力が衝

遼中京城－人物・車は鳥居博士一行（鳥居龍次郎氏撮影）

突した。そして宋眞宗の時、國境をおかして契丹と北宋と戰をした。兩方共に非常な戰爭になつて結局澶淵の戰から遼と北宋が媾和を結んだ結果、北宋から貢物といふのはおかしいと云ふので何らかの名目をつけて年々帛（きぬ）と銀とを贈ることになつた。これで平和になつて、北宋を兄として契丹を弟として、まづ交通が出來て來た。かように盛んになつて來てこの上京（皇都）と云ふものは極東における勢力の中心地になつて來たのであります。

こう云ふ風に、發展や交通上その他

の必要から南の方へ下つて來なければならぬので聖宗の統和二十五六年の頃にこゝへ來たのであります。これが中京であります。この中京が一度こゝに出來ますと、この附近に州縣が出來て、忽ちにして老哈河の中京を中心として今日の熱河省一帶と云ふものは、文化の巷になつて來た。今日熱河省に殘つております煉瓦の塔でありますとか、古い城の跡、寺院建物の跡などは、殆ど中京を中心としたものであります。例へば只今申しました如く義縣に遼時代の木造建築の寺院があると云ふのも要するにこの中京が出來てから後に出來たのであります。それですから、熱河省のことを考古學的文化史的に見るには中京を見なければならぬのです。そして中京がどうして出來たかと云ふと聖宗が巡幸せられてゐるその時に老哈河畔に七金山と云ふ山がある、これに蜃氣樓が現はれた、これに宮殿や色々な形が現はれたので、非常にこゝは清らかな良い土地だと云ふので、こゝに中京を設けた。そして中京の建築は上京の皇都に擬すると云ふことになつた。そして暫く上京にをられ又中京に來られる、上京と中京に交代にをられた。それですから考古學上熱河省を見ようとすれば、中京を忘れてはいかぬ。中京を捨てゝ熱河省を見ると丁度釋迦をはなれて羅漢を見る



（影堀氏鳥次郎居島）行一土博居島は物人の下塔——塔大內城京中遼）

ようなそしりを免れないのであります。

然らば中京の土地がどう云ふ風になつてゐるかと云ふことをさつと申しますと、この寫眞にあります大きな河、即ち老哈河のこの邊りの盆地は非常に大きな盆地であります。こゝに土城が殘つてゐる。この土城は周圍が日本里數約四里です。四里の眞四角の土城が殘つてをります。それに一邊に門が殘つてをります。この土城は正しく東西南北に向いてゐる。そして今日南の方は老哈河が入込んで來てをります。中には建物の跡など寺院の跡と云ふものが見へる。近頃支那人が中に入つて開墾を施してゐる。そして高粱など植ゑてをりますが、夏參りますと分らぬような狀態になつてをります。私は二十八年程前に參りました時は冬でありましたからよく分りましたし、今回も幸ひ高粱刈入れの時でありましたのでよく分つたのであります。この中に二つの塔が立つてをります。そしてその一つは大きな塔であります。この塔は乾隆帝がこの邊りを巡視せられた時にこの塔をのぞんだ詩がありまして、非常に感慨無量な乾隆帝が當時のことを追想した詩が殘つてをります。それからこゝの中に石の獅子であるとか、石人なども殘り、碑文も殘つてゐる。この石人は御

承知の如く遼では皇帝などの像を廟内に安置しておまつりしてをります。この石人の殘りを二つばかり今回發見しました。それから人家の跡、寺院の跡などには當時の瓦でありますとか、陶器類古錢なぞと云ふものがこゝに存在して、當時のおもかげを偲ぶことが出來ます。

六

そこで中京を中心としてこの邊りをあちらこちら歩いて丁度、十七、八日ばかりこの調べをして、赤峯へ出たのであります。この赤峯は名前が赤の峯と書いてあります。蒙古語でオランハタと申します。この川の向ふに屹立した岩山が存在してゐる、赤い岩山それをオランハタと云ふ。オランと云ふのは赤、ハタと云ふのは屹立してゐる岩山のようなものを云ふ、これを支那人が飜譯して赤峯と云ひます。また支那人は簡略にハタと云ふてをります。こゝは西翁牛特の王様の管轄地であります。翁牛特の役所が今日でもある。それを乾隆の時になつてこゝを開いて縣になつた。この赤峯と云ふ縣が一番極北の縣であつたのであります。これは此處の廟にある碑文を見ますと我が清朝の極北の地であると云ふこと

を書いてある。貿易などは中心地であつた、天津北京から入る物資蒙古から出る物資が集つて、そして出て來たものです。それですから、この邊の大豆の相場や物資の相場は赤峯できめたもんです。

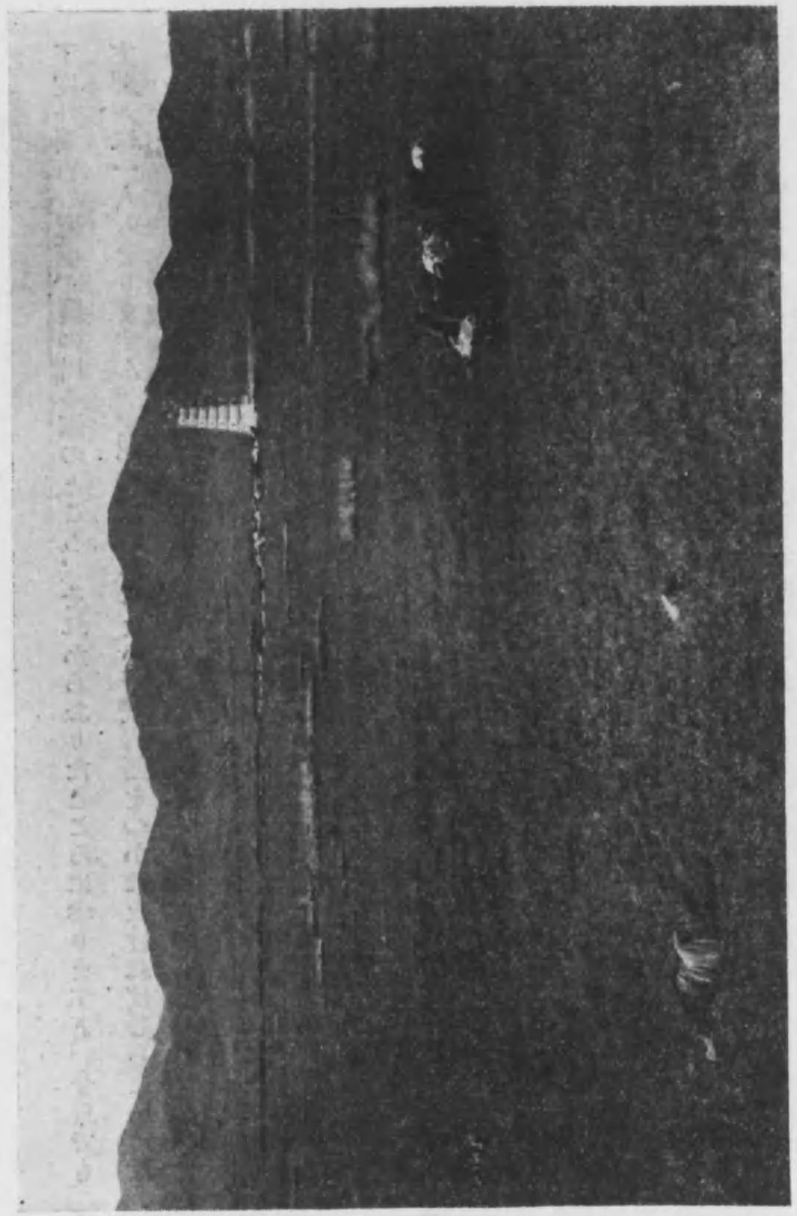
丁度私共二十八年程前に參りました時は、まだこゝには日本の領事館はなかつた。此處が頗る必要な所であると云ふので日本の領事館が出來た。古い土城だとか色々なものがこゝに殘つてゐる。それからこの附近を調べて、赤峯から英金河を渡つて烏丹城（ウーダンチヤン）と云ふところから潢河（シラムレン）を渡つて、林西と云ふところに行つた。この方面は二十七、八年前にも行き、昭和五年に行き、これで三度目です。こゝは沙漠地になつて居る。

御承知の如く林西と云ふ所は明治四十一年頃に出來た縣であります。こゝに私共二十七、八年前に參りました時に、縣が出來ると云ふことを言つておりました。それから昭和五年に參りますと立派な縣になつて物資が用足せるようになつた。故に、赤峯の勢力はこれにとられてしまつたのであります。こゝは大巴林の蒙古であつて清朝の末から中華民國になつて支那人が侵入して來たのです。こゝから烏珠穆沁（ウジムチン）これは興安嶺の西になる。それから

丁度外蒙古の國境、鹽の出る湖のところ、それからおりたところに參りますと、今日でも支那人は一人もをりません。支那語はわからない。蒙古語をつかはなければ分らない。ほんとのテントをはつた遊牧の蒙古を見ようとするにはこの邊り一帶がよろしい。

これを越へるとソヴイエートの外蒙古になる。昔は入り安かつたが今は入ることは出來ません。この邊りの調べをしてそれから林西へ出てまいりました。それから再び林西からこの道をつたつて小巴林の白塔子（バイトーズ）と云ふ、こゝは遼の慶州のあつた所です。このところは度々私共の行つたところであります。

慶州城と云ふのは、即ち遼代には上京府に屬する慶州城の跡が殘つてをります。大きな塔が殘つてをります。それからこの中に陀羅尼幢と碑文等が殘つてをります。大變面白いところであります。この方面に石碑が一つ殘つてをりますが、これは德富先生の只今お話になつた契丹と北宋と交戰の後、平和の使となつて行た曹利用の名が書いてある碑文が殘つてゐる。これは歴史的に非常に大切な碑文であります。

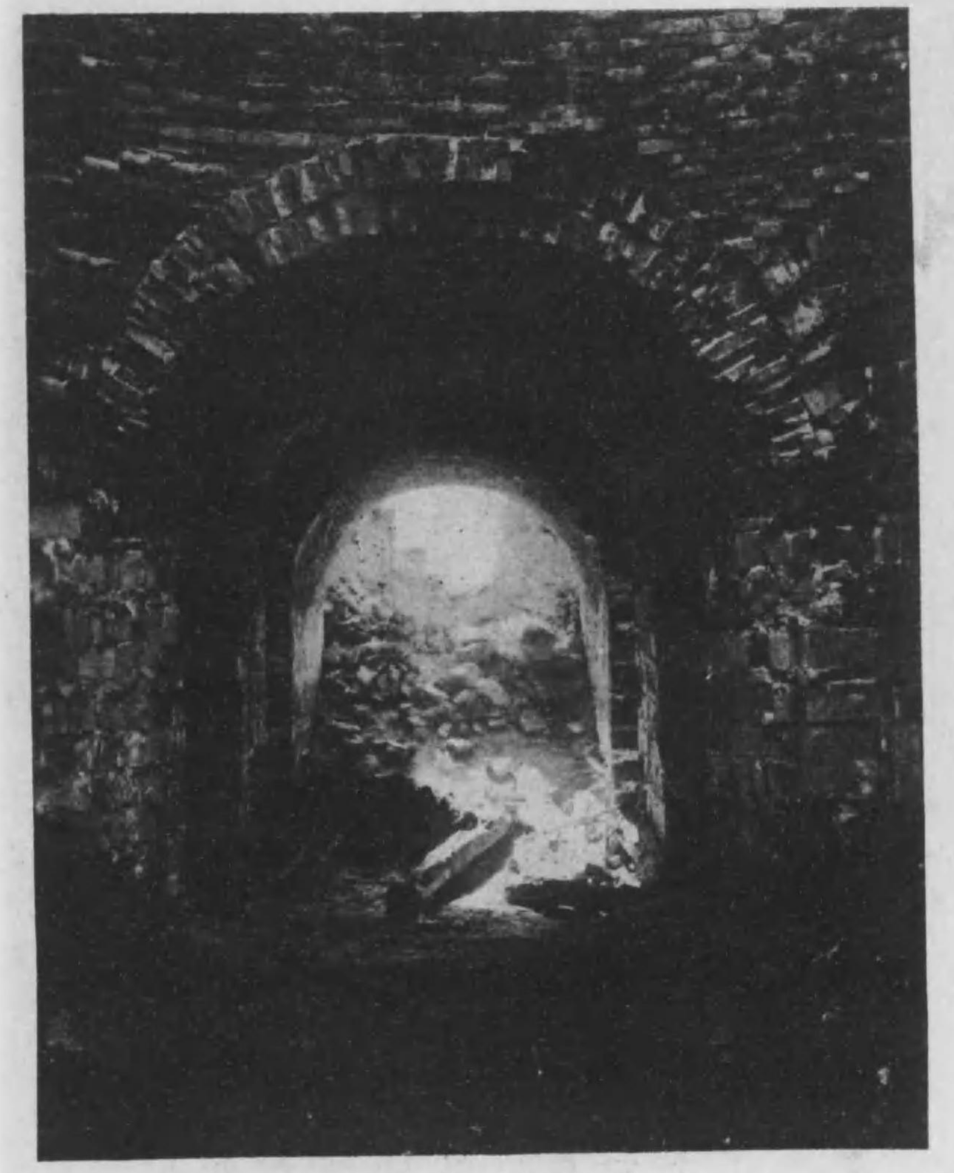


（遼西十廟子島）　若子のそと旅州遼

それから此處の北にワールマンハと云ふところがある。

これは慶州から日本里數で五、六里のところであります。興安嶺の中です。こゝに遼の聖宗、興宗、道宗三皇帝のつまり遼の黃金時代の三皇帝の陵がある。そこへ參りまして調査致しました。これは昭和五年に調査致してをりますから今回は最もある特別のところに注意して調べた。（地圖を指されて）こゝにしるしがありますが、東の方が興宗陵、次が聖宗陵次が道宗陵、卽ちまん中がお父さまでこの息子が興宗この息子が道宗、まん中が一番古い。眞中の聖宗の陵墓は破壞し、室內は水浸しになりまして非常に見るに困難です。もう或室の如きは天井まで水が達しております。けれども此處から四五町離れた所に立派なおそらくは遼の藝術品としては優等品でありませう、八角の金剛界の四佛を彫つた石幢が殘つております。これは非常に立派なものであります。それからサンスクリツト文字を彫刻した尼羅陀幢が殘つております。

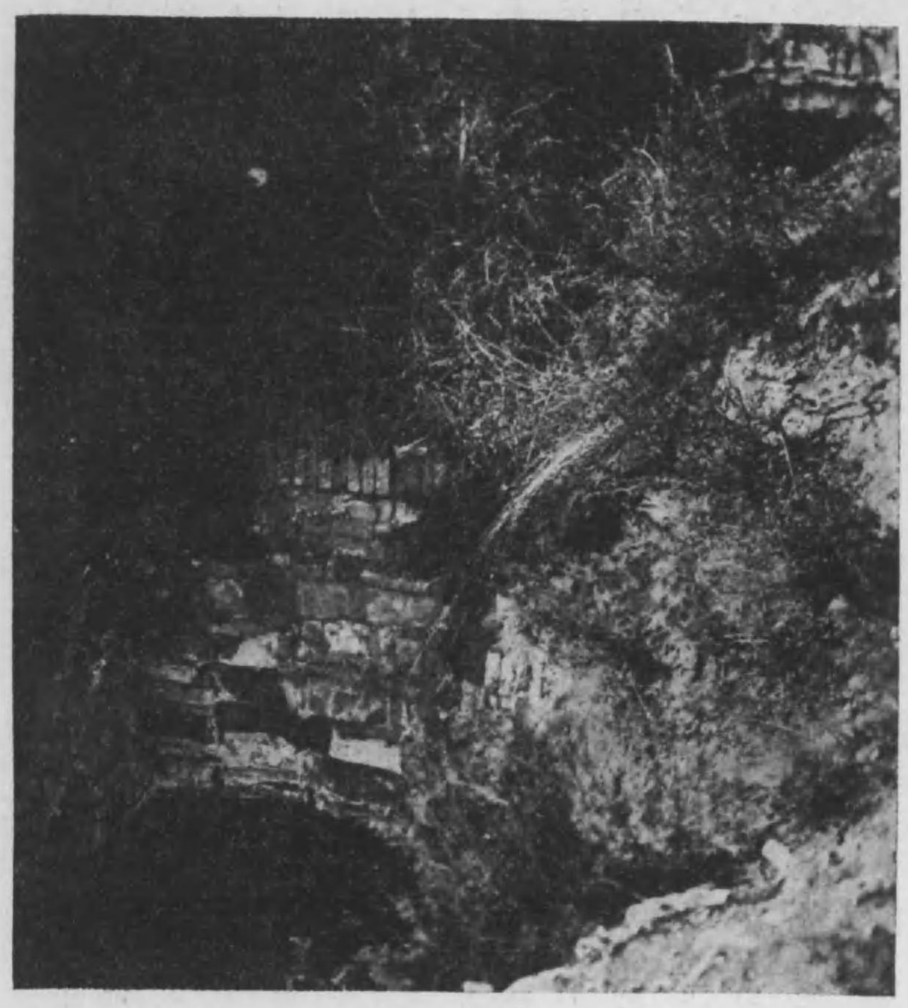
それから西の方の道宗陵はこれは非常に荒れ果てゝをります。これについて支那人その他某外國人等の此處を近頃發掘して終にかくの如くなつたのです。が今日奉天に來てゐる



西陵内部（鳥居博士撮影）

道宗皇帝、その皇后の哀冊はこの陵中に存在して居たのです。この邊の道宗皇帝及びその皇后の漢文及び契丹文の哀冊は本日こゝに圖版にしておきましたから御覽を願ひたい。それから東の方の興宗陵は中の遺物と云ふものは殆どとられておりますけれども、天井や壁に壁畫が殘つてゐる。これを私は昭和五年にスケッチしたり、或は中はまつ暗でありますがマグネシユームで寫眞を撮影いたしたけれどもその當時マグネシウムが足らなかつたためにおとした分がありましたが、これを今回更にとつた。

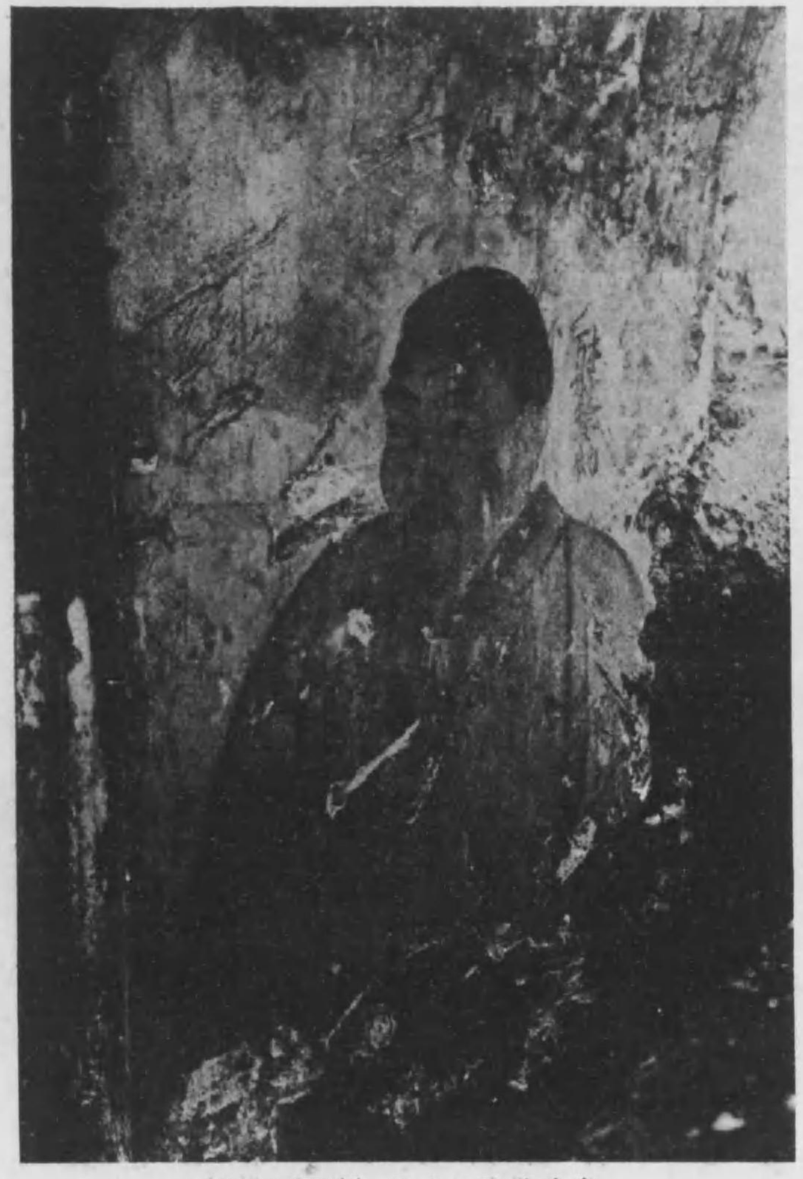
こゝの繪と云ふものは五彩を以つて彩つておりますから、寫眞では唯だ黑色になつてしまふ。どうしても模寫をしなければならぬので模寫に參つたのであります。これは風景畫及び人物畫——この陵墓のプランセクションがありますから御覽を願ひますが——中央の室の東西南北に春夏秋冬の風景畫を書いてゐる肉筆であります。この肉筆は春が丁度南東に、夏が西南に、秋が北西に、冬が東北にあります。これは非常に立派なものであつて各々一つの高さが一丈二尺幅が一丈位ありまして、北宋畫を見るに非常に良いものなんです。春から夏、秋、冬枯れの景色が描かれ、これに配するに動物、鹿が出る鳥が飛んでゐ



中陵の入口（鳥居博士撮影）

る。松の木或は濶葉樹その他牡丹花タンポヽ、スミレ、姫百合そう云ふものを配してゐる工合が非常に面白いのです。これは私の娘綠子が寫生をしたのでありまして一つの山水畫を寫生するに八日ばかりかゝつております。今日北宋の繪と云ふものはコッピーすらも乏しい。肉筆が殘つてゐるのは大變珍らしいと私は考へる。これは唐の繪と南宋の繪とをつなげるものでありまして、非常に繪畫史の上においても大切なものである。

それから人物畫が各壁に一面描かれてゐる。この大きさは身長大で五彩を以て色とりどりの圖を書いてあります。面白いのは契丹の風俗畫です。一人で暗い中で寫眞をとるとか模寫をしてゐるとまつくらがりで契丹人がその當時の風俗で出て來て物を言ひそうな氣がして一寸驚く。兎に角これ等は契丹の風俗を見るばかりでなく、契丹研究には直接比較參考になるものです。今日學者が契丹を研究するには『遼史』とか『契丹國志』等が根本資料でその他は『宋史』とか北宋の隨筆などに過ぎない。けれどもこれ等いづれは支那人の書いたものによつて知るのであります。しかも遼の歴史即ち『遼志』の如きは元の時に出來たもので非常にその時代を去ること遠い。然るに幸ひにこゝの壁畫は契丹人の描いたものであ



東陵壁畫の人物（鳥居博士撮影）

りまして、資料としては値打ちが非常に違ふのです。

私共出來るだけ寫眞をとり繪を描きました。以前參りました時には春夏秋冬撮影の際、マグネシユームがないために、冬の景色をおとしておつたが、今度これをとりましたが、四、五年經過しますとこの中がもう非常に壁が落ちて以前のおもかげがなくなつて來てゐるのは非常に殘念でありました。殊に人物畫の如きは、そう云ふ風でありますが、なくなつてゐる畫もある。こゝはもう山の中で、我々はテントを張つてをつたのであります。たれも住んでゐない。これは危險をおかし、氣候とたゝかつて仕事をしたのであります。で、こゝに面白いことには、こゝに書いておりますのは契丹の文字です。奉天に來てをります。卽ち遼の道宗及皇后の八つばかり契丹文の哀冊、哀冊篆蓋がある。あの彼處に寫眞にも出しておきましたものがこれです。これに對してまた漢文の哀冊と哀冊篆蓋がありますがこれ等は以上契丹文のそれと對合して居るものです。

そしてこの漢文・契丹文はともに對譯であります。漢文と契丹文とが相對稱してゐるそれですから、契丹文四枚あると漢文の方も四枚あります。これ等の契丹文字は、石面に壁

畫の人物の肩の所にしるして居る契丹文字は、墨で書いたもんです。壁畫の人物畫のところで御覽を願ひたいと思ひますが、その繪の人物に署名してをります。

當時の繪はスケツチの聊か理想が入つてをります。スケツチの寫生風の實物大の繪であります。その肩のところに、各それ々々サインがある。その人が署名して書いてゐる。これは私は非常に大切な資料と考へてをります。なぜかと云ふと、契丹文字は肉筆で書いたのは、今日の所ではこれの外にない。契丹人の紙に筆で書いた御經であるとか、手紙であるとか役所の記錄が出て來ればですが、然るにこれは殆どない。自分の描かれた繪に自分が筆に墨をふくまして契丹文字でサインしたもんです。今日殘つてゐる契丹文字の肉筆はこれだけしかない。これは世界的に非常に大切なものであると思ひます。兎に角同契丹文字が肉筆でこれだけ殘つてをります。私は出來るだけこれを調べましたが、惜しい事には損したり剝げて分りませんものもありますが、今日はその文字は十七人分ばかり殘つて居るのであります。この十七種の契丹文字は、世界的に大切なものであります。

かつて內藤湖南博士と中村不折畫伯との間に六朝文字で議論があつた。卽ち六朝文字は

石の面に彫刻したのと、筆で紙上に書いたものとの間に相違があると議論がありましたがこの契丹文字でも石面に石刻したのと紙に書かれた場合とは違ふ樣であります。今御覽に入れる契丹文字は大きさもこれだけの大きさで模寫して參つたのでありますが、この文字を除いたならば契丹文字の墨で書いた資料はないのでありまして、これは非常に注意すべきものだと思ひます。これに人物畫がついておりまして、丁度肩書きです。この字を御覽になつて分りますが上手下手或は個性が違つておりますからやはり書體においてもその個性によつて書體が違ふように、契丹の文字が行はれた當時も個性によつて違ふと云ふことが十分知ることが出來ます。それから契丹文字についても一度御注意申上げたいことは、陶器の裏面に契丹文字を書いたものがあります。或は陶器を燒く時に契丹文字を刻したものがあります。或は鏡のへりに所有者の名前を刻したものもあります。それから朝鮮の古鏡の中に契丹文字を入れてをるものもあります。契丹文字は瓦の上にも刻したものがあります。これは甘肅省から一二品出てゐるうちに、契丹文字の書いた瓦があります。遼は亡んだが、彼等は西に走り、西遼と稱してをつた。その古城の跡でこれが發見せられてをり

ます。

以上に據つて見ると、契丹文字と云ふものは色々のものに書かれ刻せられたことが分ります。今日鏡とか陶器の上に書いてゐるのは、今日圖版だけに致しまして、これは持つて參りませんから、これ位の程度にして契丹の文字をよしますが、尙ほ陵墓の天井その他には當時の裝飾模樣が殘つてをりまして、當時のデコレーションの上において面白いと思ふのであります。

まあそんなようなことをこゝで調査した、この調査について私共は非常に困難した。それは此處にテントを張つて仕事をしましたが、此處は山上で、無人の土地であります。よく吹雪がありまして天氣の良い日は朔風いはゆる强風が吹いて來る。然らざれば吹雪となる。こんな所でテントを張て居るばかりでなく、陵墓内に這入つて繪を書いてゐると、繪の具の水が凍る。中は眞つ暗です。最初は石油だとかランプを持つて行つたが途中でこわれてしまつた。やむを得ず多量のローソクを使つてやる狀態で非常に困難を致しました。それから私の伴つてゐる支那人（便衣隊）が我々を殺そうとした危險にあつたのであります。

す。蒙古兵がこれを發見致しまして、それで先づ危險を免れた、危ぶないことがあつたのです。

遼の時は此處は黑山と稱してをつた土地であります。こんなような調べをしてゐると、土匪が十里向ふに起つたと云ふような話をしてゐる。と、下の蒙古の役所から不安だから下りてもらひたいと云ふ。もう少し仕事が殘つてゐるのを殘念ながら已むなく白塔子に歸つて來て、それから林西へ歸つて、赤峰へ歸つて朝陽へ出たのであります。

朝陽へ來て調査し、義縣から錦州へ出て歸つた。そして五ヶ月ばかり調査旅行に費しました。そしてどんなようなことを調査して來たかと云ふと、つまり今回は遼の中京を中心としたところの考古學的、文化史的の調査、それからワールマンハにおける遼の陵墓を中心としてこれに附隨したものをやつて參りました。

八

以上を總括して、私は今論文を書いて居りますが、契丹人は、只今德富先生のお話にもありました通り、北宋の文化が大部分を占めてゐる。例へば今の繪の如きにおきましても、

支那になくなつた繪と云ふものがこゝに殘つてゐる。御承知の如く遼の皇帝、皇太子、皇族を始めとして繪は非常に熱心に描かれたもんです。文學も盛んに學ばれ、醫巫閭山上に圖書館を建てたと云ふ位です。

屢々北宋に使ひしたものに歸へりがけには必ず繪などを購入さして來たと云ふことを傳へられております。これだけ繪が分つた。

それから當時北宋との關係に面白いのは大極圖の如きものであります。これが這入つて來て居ります。北宋は御承知の如く五代の亂を平げて始めて泰平を形勢したので、支那の社會を一新した時であります。所謂北宋は支那に於けるルネサンスです。申すまでもなく哲學なども北宋に入つて變つて來、また佛教なども大分變つて來てゐる。道教も盛であります。北宋の佛教と道教と儒教と行はれてゐる。あゝ云ふものが北宋の方にともに盛んであり、またこれが混化して居ります。こういふやうなそして支那に行はれてゐる以上の如き哲學だとか、宗教や、その他の文化と云ふようなものゝ感化と云ふものが如何にこの契丹に及んでゐるかが分ります。

それから古墳の中に描いておりますデコレーション裝飾模樣などを見ますと、これまで支那南北朝から隋唐の頃までは非常にハイカラであつた西域式紋樣を用ひてをつた。例へばアカンサスとかホインサツクルとかの西域紋樣は契丹になると牡丹が多くなつて來る。西域の方から入つて來たサツサン朝のもの、ビサンチン式のものは固有の草花模樣と變つて來た。卽ち牡丹の花に變つて來る。そしてこれに獅子がくつついて來る。こう云ふ北宋には面白い形式のものがある。北宋の繪でも分りますけれども、契丹の方面においてこれが良く分つて來るのです。それから、なほ模樣や何かにおいて宇治の平等院であるとか、醍醐の塔、それから陸前の中尊寺九州の富貴寺と云ふところにある藤原時代の模樣がこれによく似てゐるのです。例へば鳳凰孔雀蝶の如きもの、それから唐獅子の模樣、丁度日本の後になつて紋章になつて來るようなものがやはり多い。繪なぞどらんになつても分りますが、藤原氏の頃の大和繪と稱するものは北宋の繪と關係があるのではありますまいか。北宋の繪も山などはやはらかく描いてをります。鹿が泣いてゐるところなどと云ふものは丁度『信貴山緣起』を見るような感じがしてくる。これが南宋になると墨繪風の極めて理想の

繪となつて來る。北宋にはそれが相違して居ります。北宋の繪は繪卷における彩色をした繪です。

御承知の通り徽宗皇帝の時に出來ました『宣和畫譜』が、今日殘つてゐる。これは北宋、徽宗皇帝の當時、宋朝の御藏に所藏せられ居る諸畫の目錄と簡單な說明であります。これは三國時代あたりから北宋に涉つての繪が相當見へます。そしてこれには北宋の繪の畫題はよく分りますが、繪そのものに至つてはさつぱり分らない。しかるに只今申しました契丹皇帝の陵墓內に壁畫が描かれてゐるから、これで北宋で見えない北宋の人物畫・山水畫・裝飾紋樣等が殘つて居て、これ等がよくわかります。

九

それからなほ注意すべきことは宗教であります。彼等の精神文化ではこれは密教が大變入つてゐる。契丹は御承知の如くウラルアルタイ民族で古來シヤーマン教を信じたものでありますが、彼等が遼帝國を立ててから、支那の文化が入つて來てからと云ふものは、儒教も道教もこれに入れてをります。それから、殊に面白いのは、佛教と云ふものは非常に

契丹に入つてゐる。例へば石經なども遼朝以前から造つてをりましたが、これが支那では出來なかつたのを遼に至つて、これを大成してをります。それから一切經を作つてをります。高麗の藏經と云ふものは、契丹の藏經を參考(北宋のそれも)にして出來たのであります。

それから彼の道宗皇帝の如きは『釋摩訶衍論通玄鈔』に御製を書いてをります。

今年は我が國弘法大師の記念の年でありますが、弘法大師の書きました釋摩訶衍論註があります。大師が註釋してゐるこの書は日本密教の根本的のものとなつてをるが、これに對し、叡山その他の各僧侶は此大師の釋摩訶衍について價値あるものでないと非難して餘りよく云はないが、大師はこれを大切なものとし、『十住信論』とともに最も見るべきものとして居ります。この書は、果してその作者についての論を暫く致しませんが、契丹においてもこれは非常に大切なものとして出版してをります。そして、道宗皇帝がこれにつき御制を書いてゐる位で、これは非常に大切なものであると書いてある。契丹の同論註と弘法大師の同論注と私は暇があつたら比較して見たいと思ひます。遼の道宗皇帝は、彼の梁

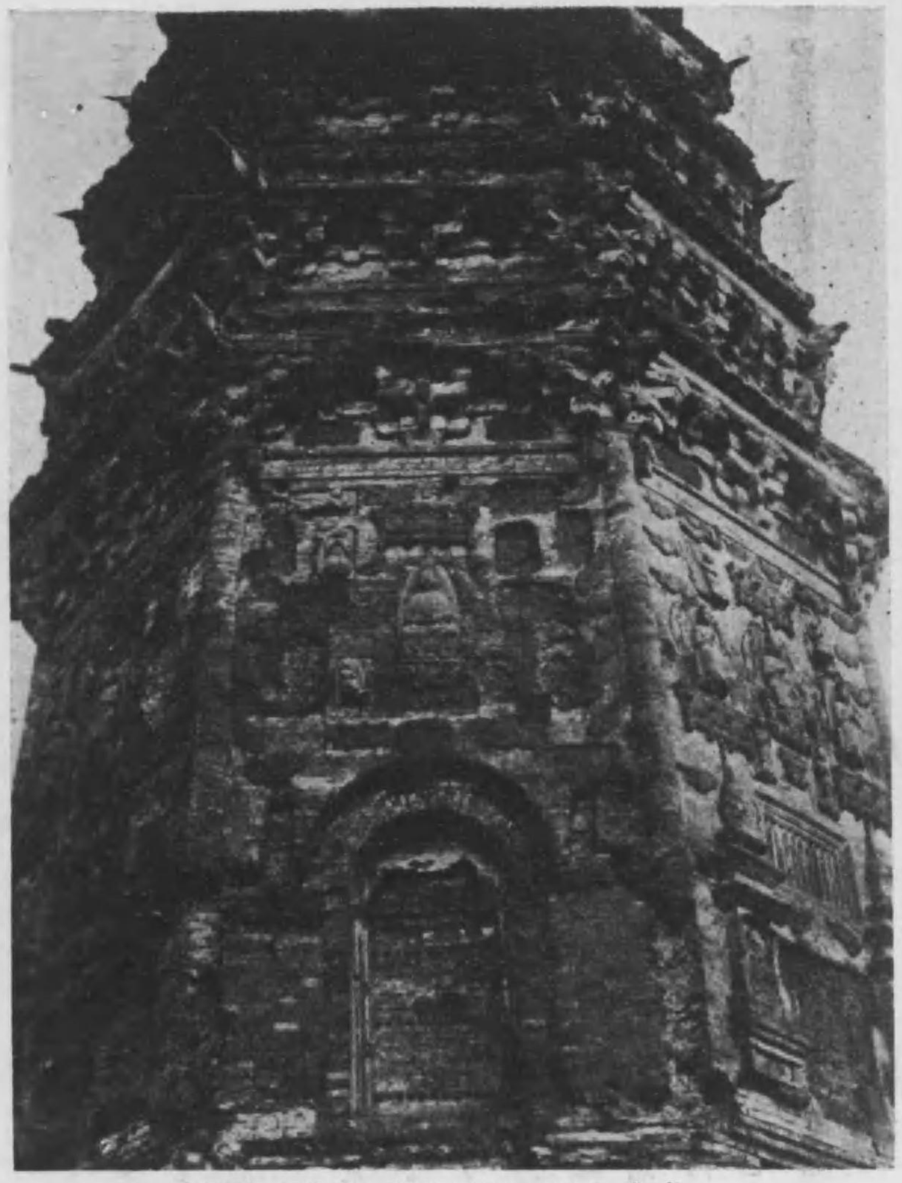
の武帝より佛教史上優れてゐたと申す程です。當時の佛典が高麗に殘つてゐる。高麗の藏教中これが認められます。朝鮮には契丹の年號のついてゐる碑文、それから佛幢などの上から考へますと高麗の佛教は非常に關係があります。

かくの如く契丹の佛教と云ふものは非常に盛んでありました。さうですからこれは特別に研究しなければならぬ。殊に精神文化の上において契丹文化の上において忘るべからざる一つの大切な重なる資料であります。契丹では當時顯教と密教が行はれ、卽ち顯密二教です。そしてその顯教は華嚴教を主としてをつた。私共今回見るうちに陀羅尼幢に色々の御經の文句が鐫られてゐる。例へば光明眞言、百字眞言、それから我が國法隆等の百萬塔の中に入つてをります清淨無垢教や尊勝陀羅尼等が大分殘つてをります。密教に關係したものが大分あるのです。これは私共元來ナチュラルサイエンスに從事する人間ですが、こう云ふ方に入り込んでやる事になつて來ました。それで契丹のそれと、高麗藏經や色々の比較をしてをります。

契丹に密教が盛んであつたと云ふことは今日考古學上から充分認められます。これに就

て面白い事實は、遼の上京(皇都)には密教の金剛界の曼荼羅が殘つてゐると云ふことを申して來たことがありますが、今回朝陽に平地山上ともに都合五基の塼塔が殘つてをりますが、この塔の中の四つまでが密教に關係したものです。四角の塔があのあそこに寫眞圖版がありますから御覽願ひます。この四角の塔にどんな圖像を示してをりますかと云ふと、それに金剛界の四佛を現はしてゐる。これは非常に面白い、例へば南の方には寶生佛、東の方に阿閦佛、北の方には不空成就佛、西の方には阿彌陀佛、いはゆる密教で云ふ四佛であります。そしてこの金剛界の曼荼羅の面白いのは、これがすべて四佛が日本傳來のやうな螺髮で蓮座上のそれでなくいづれも五智の寶冠をいただいた菩薩方で、而かもすべて馬象鳥等の上に座して居ります。一寸日本の四佛と形式を異にする。

これが最も珍らしい、それで日本の密教圖像の研究上、日本に來てゐるものはこれと遼ふのです。この鳥の座に乘り獸の座にのつてゐるのはこゝに注意すべき慈覺大師が持ち歸られました金剛・胎藏の兩曼荼羅であります。石山寺所藏の曼荼羅にもこれがあります。この曼荼羅に現はれた四佛は五智の寶冠を戴き獸座に座してをります。これについて日本の



南塔西面の阿彌陀佛　(鳥居博士撮影)

密教の圖像研究學者は非常に不思議なものであると云つてをります。然るに、これが契丹の方では普通なんです。以上は餘程注意すべきことと思ふ。これに面白いことには梵字即ち種子が附けられてゐる。御承知の如く眞言宗密教の方でこの種子は信仰上神秘なものとして下に蓮座がおかれてゐる、これが今回朝陽で見ましたのに種子が蓮座にのつてゐる、これらもやはり支那ではこれまでないとしてをつたものがあるんです。それでこれまでの日本の佛教史などの研究の學者の說では、支那ではこの眞言密教と云ふものはなくなつて、みな日本へ來てしまつたと云ふ人が多い。これも左樣でせうが、契丹にこう云ふものが殘存するとすると、密教は北の方で榮へてをつたことが分ります。

今日の熱河省に金剛界の曼荼羅があると云ふことはよほど注意を要します。一體曼荼羅と云ふと、これまでの研究では紙に書いたものが主として曼荼羅としてをつたようでありますが、立體のこう云ふ塔の表面にあるのを見ると、立體の曼荼羅は當時支那に行はれてをつたと見なければならぬ。しかも熱河省に殘つてゐる四つの塼塔に殘つてゐる立體の曼荼羅は非常に契丹は亡んでも曼荼羅はやはり彼等契丹人を守護してゐるような感じが起

る。それからこう云ふふうに金剛界の曼荼羅は、彼處に寫眞を陳列しておきましたが、遼の上京にも殘つてゐる。遼の上京には二つ塔がありまして北の塔と南の塔がある。南には立派な金剛界の曼荼羅がある。慈覺大師將來の曼荼羅に似てゐる。これは金剛界曼荼羅として密敎では非常に大切なものです。契丹に立體な曼荼羅が殘つてゐると云ふことは學術上珍らしいことのように思へる。

それから契丹の塼塔では不空成就佛とか、阿彌陀佛、寶成佛、阿閃佛等は丸味を帶びた半肉身を現はしてゐるのに、朝陽市街に殘つてをりますところの塔面のこれ等の四佛を見ますと、これ等も等しく半肉身になつてをります。けれども、その面が丸味を帶びず平面となり輪廓の線が恰かも筆で描いた線になつてをります。これは恰かも彼の吳道子の畫風の筆つきに似てゐる、吳道子が密敎の諸尊を描いたと云ふことはこれは徽宗皇帝の時に出來た『宣和畫譜』の中に見へます。その畫風のものが朝陽の塔の面に現はれてゐるように思ふ。これらはよほど注意すべき點です。

それからこの契丹に行はれたかの密敎と云ふものはこれは唐の時の密敎と北宋の時の密

敎とが大分あるのではないかと思はれるのであります。

唐の時分には——その前からでもありますけれども、飜譯院が出來てをつた。大きな飜譯院が朝廷の管下に出來てをりました。それで昔のお經はこれで飜譯し、また色々偉い人も出てをります。殊に密敎の盛んな時には唐の都で經典を譯したものであります。けれども唐が衰へて五代の亂、廢佛の時代になつては飜譯院はなくなつてしまつた。

然るに五代の亂が平げられて、北宋の太祖時代になつては佛敎の信仰が復活し、これを政府で保護する事となつた。一體北宋の太祖太宗は文化事業に注目し、學問を盛大にせしめられた。內亂で散逸してゐるところの書物などを集めて文化に助力した。北宋は實に支那のルネサンスです。そこで太宗になつて飜譯院を北宋の都に設けたのであります。天竺から盛んに坊さんを招聘しましたが、あの時は色々な坊さんが飜譯して居ります。これらの飜譯した經典が契丹に入つて居るのでありまして、これは餘程注意すべき點であります。たとへば遼の上京の南には京都の叡山と皇都におけるが如く、アルクイブルジヤウ、ウブルグイブルジヤウ等の遼の古刹の趾があります。これは山の佛敎、五臺山式の佛敎が

行はれ、そして叡山に於けるが如く皇都を守護してゐる契丹のお寺が殘つて居りますが、そこに陀羅尼幢が多く殘つてゐる。この陀羅尼幢の内にはオム　マニ　パトメ　フンの咒があります。これは西藏から蒙古に入つた陀羅尼と一般に考へてをり、元以後のものであるといふ風に考へてをる。然るに契丹のしかも興宗の年號の入つてゐるものにこれがあるのはどういふ譯のものであるか、私も非常に不思議に思ひましたが、これは北宋の新譯のお經にこれがあるので、卽ち『莊嚴寶王經』の六字咒がこれであります。これが北宋で飜譯した密敎の經典が契丹に入つてゐる證據であります。

斯う云ふ風に色々面白いことがあつて、私もこれ等が爲めに研究上深入りし過ぎて、佛敎の經典との比較を始めてゐるのでありますが、論文を書く積りでをります。

私は近く歷史考古學を建てようといふ考へでありますから、藝術史家と一緒に斯ういふ方面の深刻なところまで行かなければ駄目で、誰かゞ研究してくれなければ、一層自分でやつて見ようとい奮發心を起したのであります。

契丹の文化といふものは上流ブルジョアの社會では佛敎の感化、華嚴經、密敎の顯密二

つの感化がよくわかる。これは佛典の研究の上において、或は尊像の研究の上において、斯うふいふ結果になるのであります。今回大藏經出版部から圖像の出版が續々出るといふことは、大變私共のために參考になるのでありますが、あれには契丹の陀羅尼とか圖像なども入れなければ嘘のような感じが起るのであります。契丹の研究にはシヤーマン敎は固より認めなければならぬ。また陵墓の如きも矢張りその古式で葬つて佛敎臭くないように思はれるが、これは一寸面白いことであります。それから儒敎、道敎はもとよりの話で、道敎の神像は上京の南塔にも見えてをります。儒敎でも當時の北宋に出來た新しい哲學、新しい倫理觀といふものが入つてをるのでありまして、時代の流れといふものは矢張り北方の契丹にも及んでゐるといふことは旣に德富先生のお話にもある通りであります。

次にネストリアン――ネストリアンが入つてをつたように思へるのであります。それは十字の印があるのです。それから同寺の須彌壇におけるようなものゝ上において、ネストリアンが入つてをつたと考へられるのであります。御承知の如く元の時にネストリアンが入つてをつたといふことは近頃の研究によつてわかつて參りましたが、遼・金においてどう

東陵内山水壁畫(秋)をスケッチする鳥居博士令嬢綠子さん(鳥居龍次郎氏撮影)

であらうといふことは、まだ問題が未着であります。佐伯さんは支那その他においてネストリアンのことを大分研究されてをりますが、遼の時においても遼の皇都においてネストリアンの遺物が認められるのでありますが、遼陽で私共古墳を發掘いたしました時には瓦製の大きな十字架を數個得てをります。それから首にかける十字架は各所の契丹の遺跡から發見されてをりますから、契丹の方にネストリアンが入つてをつたといふことは考へることが出來るのであります。それから墓の如きは上流の人では立派な墓を造つてをります。現に陵の如きはこれであります。下流ではどうかといふと火葬をして骨壺に入れて埋めた程度位ひに思へる。今少し古くなると甲冑部分まで入れて葬つてある例もあるのであります。この點は非常に複雜であります。

一〇

それから陶器でありますが、これはこゝに上田さんもお見えになつてその道の御專門家でありますが、陶器の破片がなか〳〵多い、均窯とか定窯などの如きはこれであります。遼上京皇城などには定窯のような破片が大分多くありますが、また均窯も交つて居る。然

るに今回遼の中京に行つて見ますと、其處に綺麗な均窯破片が多く落ちてゐて、これが非常に多いのに驚きました。これはどういふものであらうか、私は陶器專門家ではありませんけれども、考古學上、間接に陶器家の助力を得て論文の中に書き始めて居るのであります。

こゝに注意すべきは、今日の中京の北、赤峰や朝陽附近一帶に當時窰跡があつたことです。北宋の使者が中京へしば〳〵行つた旅行記中の中京の北八十里に臨都關といふ驛があると記されてゐます、それから四十里北に行つて官窰館といふ驛がある、中京から百二十里、支那里數の百二十里でありますが、この官窰館は遼朝の陶器製作所であります。『欽定熱河誌』によると、赤峰・朝陽附近に窯跡があつたことを記して居りますが、これは今なくなつたが、彼の『大元一統志』のうちから取つたものです。卽ち元時代には遼の窯跡のあることを明記して居るのであります。

御承知の通り『大元一統志』はこれは今なくなつて居ますけれども、乾隆あたりの時にはまだ同書はあつたので熱河志編纂の際には、これを引用してをります。その中に今日の朝

陽と赤峰邊りに窰跡のことを各所に書いてゐる。これで見ると元の時分にはまだ窰跡があつたことがわかるのであります。それは遼の時の官窰館があるとすれば、卽ち確かに官用窰跡があつたことが明かであります。

そういふ關係から中京のあの綺麗な美しい、紫色をしたような均窯が夥しく破片となつて存在してゐるといふことは、これを十分證據づけるものと思ひます。私は以上の事實から陶器專門家小山富士夫さんに助力をしてもらひ、契丹に於ける陶器を考古學上の資料として取扱つて居ります。

古くは朝鮮の陶器はみな朝鮮で出來たようにいつて居りましたけれども、近頃の學者は早くからこの點は御注意になつてをりました。朝鮮の新羅の南山式陶器のやうなものから忽然として立派な窯が出來て、而かも官窰が各所に出來たといふことは、これは北宋、契丹邊りの影響ではないかと、私共近頃考へてきました。それは『高麗圖經』などを見ましても、契丹の捕虜のうち工藝に巧なものが居る。彼等を使役して種々の工藝品製作に從事せしめたといふことが『高麗圖經』にある。斯くの如く北宋或は契丹あたりから職人が來て朝

鮮の陶器を盛んにし、また窰場などを見て、契丹や北宋を眞似て高麗朝に官窰を各所に設けたものではなからうかといふことが考えさせられる。私は現今契丹の研究に朝鮮の高麗も注意してゐる。契丹と高麗との比較は餘程注意すべき點である。これは藏經の方からも行つた人は頗る多いのでありますが、その他の上からも考へることが出來る。

一つ面白い例は、日本の例でありますが『集古十種』にも載つてゐるのでありますが、白河樂翁公のお家に朝鮮の鐘が所藏せられてゐる。この鐘は朝鮮の鐘といひますけれども、私は少し考へがあつて、松平家に行つてこれを拜見しますと、樂翁公以前から既に同家の儒者が調査してゐる、卽ち遼鐘と書いてある。これは非常に注意すべきことであります。今日の學者はたゞ鐘の寸法はいくら幅はいくらといふようなたゞ形の上の說明だけしか與へないのでありますが、樂翁公以前・同家の儒者が契丹の鐘と奉書に認めて居ります。そして銘を注解してゐる。これは大變卓見であると思ふ。この銘の內にどういふことを書いてゐるかといふと、州の北、觀音堂の鐘云々と書いて居ります。州の北とは何であるかといふと川州——今日熱河省朝陽の西にある川州(昔の內蒙古)、川州の北、觀音堂といふの

は、川州の觀音堂であるといふことを樂翁公以前の儒者が公表してゐる。これは樂翁公の先々代の頃から同家に寫されて立派な記錄として置いてあります。また、その原稿がすつかり殘つてをります。これは遼の時、興中州のなほ北にあつた州です。尙ほこの鐘に契丹の年號が附いてをります。それは遼の天祚帝の年號が立派に鑄られてあります。これも注意すべき一つです。

最後にもう一つ申し上げたいのは、あそこに出してありますが、小さな將棋のような形をした碑文があります。これは遼の中京城內に存在する唯一の今日殘つてゐる碑文であります。これは大塔の南の古寺の軒下から發見したものでありますが、これにはお寺の名前が書いてある。お寺と僧侶の名前と、僧侶の官等、それから錢何貫といふことが書いてあります。穴明錢でありませう、これを寄付した塔を建てるために寄付したものであるかどうかわかりませんが、この內にお寺の名前が書いてある。たとへば開泰寺であるとか三學寺であるとか、そういふ名前が四五見へる。それから新羅法師といふ名前が見へる。これらは朝鮮から行つて居つた人でありませうが、高麗の時代に拘らず新羅法師と書いてある

のは非常に面白いと思ふのであります。遼で中京の出來た當時は朝鮮では高麗朝でありますが、遼へは高麗に亡ぼされた新羅の遺民も來て居ります。この事實は『遼史』でも知れますがこの碑文で彼等のうちに相當な法師になつて居たものがあることが、この碑文で知られます。

この碑文で中京附近一帶の當時のお寺との關係がよく分つて來ます。

それから尙考古學上文化史上申上げるものは尙ほ多くありますけれども時間の都合上略しますが、最後に申上げたいのは古錢であります。古錢は大變殘つて居ります。私は古錢を出來るだけ調べましたが、契丹の造つた錢は殆どない。大抵北宋の錢であります。これを見ても北宋錢が大變行はれて居つたといふこと、契丹錢が非常に少ないといふことは確かに事實と認めることが出來ると思ふ。餘り長くなりますからこれ位ひにします。

要するに遼の研究といふものは相當こみ入つてゐる研究でありまして、とても骨が折れるのであります。この研究に私共大變永い間かゝつて居りますけれども或る部分しか見ることが出來ない。殊に今回熱河省がこれに入つたのでありますから遼の中京の調べは大變

くわしくなつて來るのではないかと思ふ。そして段々日本との關係だとかいふようなものゝ上にも及んで來はせんかと思ふ。彼の平將門が亂を起す時、その原因はいろ〳〵ありませうけれども、渤海を亡ぼしたのは契丹であるとし、その契丹が渤海を亡ぼしたと云ふことが一大動機になつてゐることは彼の『將門記』にも書いてある。藤原時代には固より海外の公式の交通はなかつたが、私的貿易は中々盛んであつた、北宋の船は太宰府の海岸を初めとし、各地に寄せて居たのである。また密貿易も盛んに行はれて居た。彼の遼卽ち契丹との關係も太宰府の役人及び僧侶・商人等は密かに行うて居たもので、當時罰せられた人々もある位です。これ等は當時の記錄の上に見えてをります。彼等の或者は契丹の都に行つたものもありました。これは日本の記錄と『遼史』の上とでよく一致します。さうすると我が國人は當時契丹の皇都たる東蒙古にすでに足をふみ込んだ事となります。

以上の如くでありますから上流社會或は外へ出ない政府の大臣諸公邊りでも藤原氏は頗る軟弱と稱せられても、海外に對する智識欲物質欲が餘程深くあつたように思へるのであります。滿洲問題などゝいふものはもう藤原時代の時から日本にセンセーションを起して

ゐる。契丹の起つたといふことが將門の思想にも及んでゐる。大陸問題といふものは渤海、朝鮮、北宋、契丹を通じて非常に關係があるように思はれるのであります。これで私の講演を終ることにいたしますが、私は目今東方文化學院で『考古學上から見た契丹の文化』と云ふ論文を書いて居ります。不日出版しますから、これに對して充分な御教示と御批評を願ひたいのであります。

東亞調査會規程

（昭和九年二月改正）

第一條　本社内に東亞調査會を置く

第二條　東亞調査會は東方亞細亞諸國に關する政治、經濟、學術その他各方面に亘る問題を調査研究し、必要に應じてその結果を公表し、東亞に關する知識の普及を圖る外、或は當局に建議し、或は輿論を喚起し、以てその效果を擧ぐるを目的とす

第三條　本會の主張と行動とは大阪毎日新聞、東京日日新聞、英文大阪毎日及び東京日日とは關係なきものとす

第四條　本會に左の役員を置く

會長	一名	
副會長	一名	
專任理事	二名	
理事	若干名	

主事　二名
顧問　若干名
評議員　廿五名以内

第五條　會長は會務を總理し、副會長は會長を輔佐し、必要の際は會長の事務を代行す
正副會長は大阪毎日新聞社重役會に於て之を推薦す、專任理事も亦同じ
第六條　專任理事は會長の指揮を受け會務處理の實行に當る、主事は專任理事を輔佐す、主事は大阪毎日新聞社員中より會長之を依囑す
第七條　理事會は理事を以て組織し、本會各般の事項を審議す
第八條　理事は大阪毎日新聞及び東京日日新聞の左記職務に在るもの及び會長より特に依囑せられたるものとす
整理部長、東亞通信部長、外國通信部長、政治部長、經濟部長、副主筆、エコノミスト編輯長
調査部長、事業部長、事業課長、東亞課長、論說委員、滿洲通信總局長、上海、北平、天津、奉天、新京、哈爾濱、大連、香港各支局長、南京、モスクワ各通信部主任

第九條　顧問及評議員は會長より推薦し、將來缺員ある場合には評議員會の決議を以て補充す
第十條　顧問及評議員は本會の重要事項につきて會長の商議に參與し必要に應じて集議す
第十一條　特殊の事項を審議裁定する爲顧問會議を開く事あるべし
第十二條　本會の經費は大阪毎日新聞社より支出す

東亞調査會顧問及役員

（昭和十年五月現在）

顧問

（イロハ順）

男爵　林　權助
陸軍大將　林　仙之
陸軍大臣　林　銑十郎
侯爵　細川護立
大谷光瑞

役員

法學博士　岡實
海軍大將　加藤寛治
伯爵　内田康哉
陸軍大將　宇垣一成
公爵　近衛文麿
男爵　郷誠之助
陸軍大將　荒木貞夫
子爵　齋藤實
伯爵　清浦奎吾
貴族院議員　光永星郎
外務大臣　廣田弘毅

會長　大阪毎日、東京日日社賓　貴族院議員　德富猪一郎
副會長　大阪毎日新聞社　東京日日新聞社主筆　高石眞五郎
專任理事　平井三男
　　澤村幸夫

理事
大阪毎日副主筆兼經濟部長　下田將美
副主筆　阿部賢一
大阪毎日東亞通信部長　長岡克曉
東京日日東亞課長　吉岡文六
大阪毎日外國通信部長　上原虎重
東京日日外國通信部長　楠山義太郎
大阪毎日整理部長　平野岑一

東京日日整理部長　高田元三郎
東京日日經濟部長　西野入愛一
大阪毎日政治部長　金子伴次郎
東京日日政治部長　久富達夫
エコノミスト編輯長　佐藤善郎
大阪毎日調査部長　井上吉次郎
東京日日調査部長　黒田乙吉
大阪毎日事業部長　世川憲次郎
東京日日事業課長　正木健吉
論説委員　渡邊廣重
同　赤坂清七
同　川邊眞藏

同　永戸政治
同　石川欣一
同　三俣淺治郎
大毎編輯顧問　布施勝治
滿洲通信總局長　楢崎觀一
新京支局長　櫻井重義
大連支局長　金子秀三
上海支局長　田知花信量
北平支局長
天津支局長　石川順
奉天支局長　德富雪夫
哈爾濱支局長　森正藏
香港支局長　足利緝

評議員

南京通信部主任　岡野八太郎
モスクワ通信部主任　小林英生

（イロハ順）

伊藤忠兵衛
伊藤竹之助
櫟木幹雄
服部宇之吉
坂西利八郎
鳥居龍藏
奥村信太郎
岡崎鴻吉
川上俊彦

文學博士　高柳松一郎
貴族院議員陸軍中將　中里重次
法學博士　竹越與三郎
海軍中將　山崎一保
文學博士　山田潤二
文學博士　内藤虎次郎
大阪毎日新聞社々友貴族院議員　村田省藏
大阪毎日新聞社嘱託　上田恭輔
文學博士　矢野仁一
大阪毎日新聞社取締役理事　松岡正男
大阪毎日新聞社英文大阪毎日主幹　船越光之亟
貴族院議員男爵　福本元之助

主事

陸軍少將　阿部房次郎
大阪毎日新聞社友　佐藤安之助
理學博士　三宅驥一
東亞同文會理事長　白岩龍平
大阪毎日新聞社編輯總務　平川清風
大阪毎日新聞社取締役
東京日日編輯總務　杉山幹
大阪毎日新聞社客員　丸山幹治

（缺員一名）

昭和十年五月二十八日印刷
昭和十年五月三十一日發行

非賣品

東京市麹町區有樂町一丁目十一番地三號
大阪毎日新聞社東京支店東京日日新聞發行所
東亞調査會代表
編輯者　平井三男

大阪毎日新聞社東京支店東京日日新聞發行所
東京市麹町區有樂町一丁目十一番地三號
發行者　相馬基

東京市牛込區西五軒町五十二番地
印刷人　白井祐吉

發行所　東京日日新聞社
東京市麹町區有樂町一丁目十一番地三號

終